

H O N G O U

本郷遺跡

地方特定道路整備工事に伴う緊急発掘調査報告書

2000.3

長野県山形村教育委員会



本姬遺跡発掘調査区 空中写真

序 文

上竹田区に存在する本郷遺跡では土師器や須恵器の出土が知られ、周知の埋蔵文化財包蔵地として知られていましたが、本格的な発掘調査を実施したことがありませんでした。この度当地を東西に縦断する形で村道の新設工事が計画されたため、庁内開発部局と保護側である教育委員会が協議を重ねた結果、記録のための緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は平成11年10月に行われましたが、参加者皆様の御尽力により無事終了することができました。また今回発見された成果は、今後地域の歴史解明に役立つ資料になると思われます。

開発事業に先立って行われる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提として実施される側面があります。開発により私達の生活が便利になる一方、貴重な歴史遺産が失われることは残念ではあります。しかしながら当時の暮らしぶりが判明し、郷土の先人が歩んできた歴史が解き明かされることは、今を生きる我々としても学ぶことは多く、今後に生かしていくことで報われるかとも思われます。

最後になりましたが、発掘調査に御参加いただいた皆様、また調査実施に際して、多大な御理解と御協力をいただいた地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

山形村教育委員会
教育長 上條 勝

例　　言

1. 本書は、平成11年10月7日～10月29日に実施された長野県東筑摩郡山形村上竹田区に存在する本郷遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 本調査は、地方特定道路整備事業（村道北38号線）に伴う緊急発掘調査であり、山形村教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。

3. 本書の編集・執筆は、和田和哉が行った。

4. 本調査および遺物整理作業にあたっては、以下の方々の御協力を得た。記して感謝申し上げる。

安藤　満　　井口くみ子　　池上　英夫　　池上　由子　　大池　佳子
上條　利昭　　古田　守一　　山口　栄子　　横水　良夫　　(50音順、敬称略)

5. 本調査および本書で用いた遺構の略称は次のとおりである。

土壙 → SK　　ピット → SP　　掘立柱建物址 → ST　　集石遺構 → SH

6. 図中で用いた方位記号は、すべて磁北方向を指している。

7. 本書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』である。

8. 航空写真撮影は株式会社みすず綜合コンサルタントに委託した。また遺構平面図作成にあたっては、株式会社写真測図研究所に作業の一部を委託した。

9. 本調査で得られた出土遺物および調査の記録類（図面・写真等）は山形村教育委員会が保管し、出土遺物は山形村ふるさと伝承館（〒390-1301 長野県東筑摩郡山形村3866 TEL 0263-98-3938）に、調査の記録類は山形村農業者トレーニングセンター（〒390-1301 長野県東筑摩郡山形村2040-1 TEL 0263-98-3155 FAX 0263-98-4256）に収蔵されている。

10. 本書作成にあたっては、以下の文献を参考にした。

長野県史刊行会 1988 「長野県史 考古資料編」全一巻（四）

縄文セミナーの会 1987 「第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相」

山形村教育委員会 1971 「長野県東筑摩郡山形村 唐沢遺跡 長野県東筑摩郡山形村 洞遺跡緊急発掘調査報告書」

山形村教育委員会 1982 「神明遺跡 三夜塚遺跡」

山形村教育委員会 1983 「堀ノ内遺跡 北唐沢遺跡」

山形村教育委員会 1987 「殿村遺跡」

山形村教育委員会 1999 「山形村埋蔵文化財調査年報（平成10年度国庫補助事業）」

山形村誌編纂会 1980 「村誌 やまがた」

目 次

序 文	
例 言	
目 次・図 目 次	
I 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 作業の経過	1
3. 文書記録	2
II 遺跡の立地と歴史的環境	3
III 調査の結果	7
1. 調査の方法	7
2. 検出遺構	7
3. 出土遺物	9
IV まとめ	15
写 真 図 版	
報告書抄録	

図 目 次

第1図 調査地の位置と周辺遺跡	4
第2図 調査範囲	6
第3図 遺構全体図	8
第4図 検出遺構(1)	10
第5図 検出遺構(2)	11
第6図 出土遺物	12

I 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

本郷遺跡は山形村の北東部、上竹田区本郷地籍一帯に所在する遺跡である。しかしながら今まで正式な発掘調査が行われたことがないため、遺跡の時代や性格等、ほとんど不明な状況であった。こうしたなか平成9年度中に、平成10年度の建設工事事業照会を行ったところ、山形村役場建設水道課より、地方特定道路整備事業で上竹田区県道上竹田波田線から県道新田松本線へと抜ける村道を新たに建設する旨的回答があり、事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地内に該当することが判明した。

工事は平成10・11年度の2ヵ年にわたって実施される予定であったが、平成10年度工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地にはからなかったため、平成11年度工事予定地について山形村教育委員会と建設水道課にて遺跡の保護について協議を行った。まず当該地における遺構・遺物の有無について教育委員会が試掘調査を実施して確認することとし、その結果をうけて再協議することとした。試掘調査は平成11年2月22日から26日まで行われたが、事業予定地の中央部を中心に遺構が認められ、縄文土器や石器、黒曜石、須恵器等の遺物が検出されたゆえ、遺跡の存在が明らかとなった。

試掘調査の成果を踏まえて再び両者にて協議を行った結果、道路工事による遺跡の破壊は避けられないとの結論に至り、保護措置として工事着手前に遺構の検出範囲を緊急発掘調査して遺跡の記録保存をはかることとなった。

道路工事予定地は畠地であったため周辺耕作者と協議し、耕作物の栽培・収穫作業に支障のない様、収穫作業の終了後に発掘調査を行うことになり、平成11年10月より実施し、平成11年度内に室内における整理作業および本報告書の作成を行った。

2. 作業の経過

【発掘調査】

10月7日（木）雨のち曇 本日より発掘調査開始予定であったが、朝から強い雨が降り続いていたため、現場作業は中止。夕方雨があがったので、ブレハブ、発掘機材の搬入を行う。

10月8日（金）曇 重機による表土除去作業開始。表土除去が終了したところから遺構検出作業を同時並行して行う。夕方までに表土除去作業1/3終了。

10月12日（火）晴 表土除去作業続行。調査区西側には河川性の堆積があり、砂礫層の広がりが一部に見られる。遺構検出作業続行。1間×2間の掘立柱建物址、ピット・土壤約20基検出したが遺物の出土は僅か。

10月13日（水）晴時々曇 重機による表土除去作業終了。遺構検出作業もほぼ終了。

10月14日（木）曇のち雨 昨日やり残した調査区東端の遺構検出作業を朝のうちに終え、その後遺構検出状況の写真撮影を行う。遺構掘削開始。西寄りの土壤内からは拳大の石がつまた集石遺構が

- 見つかる。夕方近くになったところで雨が降り出したため作業中止とする。
- 10月15日（金） 雨 雨天中止。
- 10月18日（月） 曇のち晴 遺構掘削続行。調査区西半分の遺構掘削はほぼ終了するが、遺物の出土量は僅かである。
- 10月19日（火） 曇時々雨 遺構掘削作業を続けるが雨が降ったりやんだりの空模様あまりはからなかった。
- 10月20日（水） 晴 遺構掘削作業は夕方までに約9割終了。集石遺構のSH-01の出土状況を写真撮影・測図後、石を取り除いたところ繩文中期初頭の土器片が5点出土しこの期の遺構と判明。
- 10月21日（木） 晴 遺構掘削作業終了。写真撮影用の遺構清掃作業を行い約2/3終了。また、本日鉢盛中学校生徒職場体験の一環として上條正雄君・村山崇君・降幡駿介君・降幡優樹君の4名が発掘作業を体験しに現場へ訪れる。
- 10月22日（金） 晴 遺構清掃作業が終了し完掘写真を撮影する。本日も職場体験に武田光志朗君・早川正憲君の2名が訪れて作業を行った。
- 10月25日（月） 晴時々曇 株式会社みすず総合コンサルタントに委託し空中写真撮影を実施。ラジコンヘリコプターにカメラを搭載し、地上のモニターで確認しながら撮影を行う。
- 10月26日（火） 晴時々曇 株式会社写真測図研究所に委託し、遺構平面図の作成作業を行う。作図の際のポイントをトータルステーションで測量した。
- 10月27日（水） 曇時々雨 昨日測量したポイントをもとに遺構図の結線作業を行うが、細かい雨が降ったりやんだりの状況で本日中にすべて終了することができなかった。
- 10月28日（木） 曇のち雨 昨日の遺構図結線作業を終える。また残務作業と発掘機材の撤収。
- 10月29日（金） 雨 プレハブを撤収。本日をもって全作業終了。調査日数実働15日であった。

【整 理 作 業】

他の発掘調査も実施していたため、平成11年度の発掘調査がすべて終了した12月上旬より整理作業に取りかかるが、作業の効率上、他の発掘調査出土遺物の洗浄作業、接合作業、注記作業も並行して行った。実測図作成、図面トレース、原稿執筆を2月中に終了し、3月末には報告書発行となった。

3. 文 書 記 錄

-
- 平成10年10月30日 周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知提出。
- 平成11年3月5日 埋蔵文化財試掘・確認調査報告提出。
- 平成11年8月13日 発掘調査範囲の申請書提出。
- 平成11年8月30日 発掘調査範囲の決定通知。
- 平成11年10月12日 埋蔵文化財発掘調査報告提出。
- 平成11年11月2日 発掘調査終了届提出。
- 平成11年11月4日 埋蔵物発見届および埋蔵文化財保管証提出。
- 平成11年12月22日 本郷遺跡出土遺物の埋蔵物文化財認定通知。

II 遺跡の立地と歴史的環境

本郷遺跡の存在する山形村上竹田地区は、山形村の北東部寄り、鉢盛山（標高2446m）を背景にした松本平西山山麓沿いに位置し、ながらに東へと傾斜した広大な平地上にある。鉢盛山から東北方面に伸びる尾根は、界沢山（1994m）、ハト峰（1970m）を経て唐沢山（1774m）に達し、そこから2つの支脈に分かれ、一つは荒倉山（1495m）から白山（1387m）へ、もう一つは鳴神をへて御岳山（859m）でおわっている。唐沢川はこの二つの支脈の間を深く穿ちながら流れ、横吹沢と唐沢川の合流点付近を扇頂とした広大な扇状地を北東側にあたる波田町中下原地区に形成（旧扇状地）した後、御岳山の山脚末端付近を扇頂とした新たな扇状地を南東側にあたる山形村竹田地区に形成（新扇状地）した。本郷遺跡はこの新扇状地の上に立地している。また現在の唐沢川は、本郷遺跡の北側に近接する位置を流れているが、流路は度々変わっていた様で、下竹田区三夜塚地籍には、昔の唐沢川が流れていた痕跡が窪地としてはっきり残っている。唐沢川流域には多くの遺跡が存在しているが、集落の立地場所は唐沢川の流れる位置に応じて変わったと思われる。

この地に人間の営みが認められるのは先土器時代末期までさかのぼる。僅か1点しか発見されていないが、三夜塚遺跡出土の局部磨製石斧がある。縄文前期の遺跡としては、本郷遺跡の上流部に昭和44年に調査された唐沢遺跡があり、堅穴式住居址4軒が発見されている。また発掘調査は実施されていないが前期の土器が採取された遺跡として、唐沢遺跡より上流部にある美野里遺跡、下流部にある北唐沢遺跡がある。松本平一帯では同じ傾向にあるが、縄文中期になると遺跡数は急増する。遺跡の中心部は発掘調査されていないが、多くの遺物が昔から採取された三夜塚遺跡が最も有名で、これに北接する位置には下原遺跡、南接する位置には堀之内遺跡、北竹原遺跡がある。三夜塚遺跡を中心としたこの一帯の遺跡は詳細な調査が行われておらず、遺跡の範囲も不確定であり、遺跡名は別々につけられているが大きく三夜塚遺跡群としてとらえられるものと思われる。また、1984・85年には広大な面積が圃場整備事業により緊急発掘調査され、29軒の縄文中期堅穴式住居址が発見された殿村遺跡が存在する。しかしながら後・晚期に関してはほとんど不明な状況であり、三夜塚遺跡から後期称名寺式土器、加曾利B式土器が採取されているのみで、以降弥生時代中期までの遺物は皆無である。

弥生時代になると集落は水の便がよい稻作に適した土地が求められるゆえ、山形村においては集落が立地可能な土地は限られてしまう。よって僅かな資料しか得られていない。唐沢遺跡では弥生中期後半の小型壙が見つかっている。殿村遺跡では方形周溝基が1基見つかっているが、遺物の出土はごく僅かであった。なお、殿村遺跡と鳴音川を挟んで対岸にあたるヨシバタ遺跡、中町立道西遺跡においては、弥生中期の壙や後期の甕が見つかっており、川を挟んで右岸が居住域、左岸が墓域、川を含めた低地が生産域であったという状況が想像できる。また唐沢川扇状地扇端からはずれてしまうが、大池方面から流れてくる三間沢川と唐沢川の合流点付近、山形村と松本市にまたがって存在する境窪遺跡では、弥生時代中期中頃の集落址が発見され、平成7年度には松本市教育委員会において、平成11年度には山形市教育委員会にて発掘調査を実施している。

古墳時代の集落址はいまだ発見に至っていない。しかしながら古墳そのものに関しては、今も現存する穴觀音古墳、殿村遺跡発掘調査時に畠下から発見された殿村古墳、明治期までは横穴式石室が開口し



第1図 調査地の位置と周辺遺跡

た状況で残っていたが、その後の耕地整理により消滅してしまったと言われる大久保1号墳、圃場整備工事の際発見された大久保2号墳、古墳か否かはっきりしないが八幡犬門塚古墳、以上の5基が確認されている大久保古墳群が上竹田区四ツ谷地籍に存在している。八幡犬門塚古墳以外はいずれも横穴式石室をもつ小型円墳であることが確認されており後期古墳の特徴が見てとれる。古墳群形成の背景等は、当期の集落が発見されていない現状での追及は難しいが、山形村のみならず奈良井川西岸地域一帯を視野に、検討されるべき問題と思われる。

奈良時代・平安時代に至っても稻作に適した土地が少ない土地柄ゆえ、大きな集落址の発見には至っていない。しかしながら平安時代の遺構・遺物は縄文時代の集落址を発掘調査している際、竪穴式住居址等が同時に検出されるケースがある。殿村遺跡では13軒と山形村では最多の平安時代竪穴式住居址が検出されているが、それぞれに時間差があり同時に存在していたのは2~3軒と考えられる。この他に唐沢川流域においては発見例がないが、村内他地区の遺跡での発見例を見ても、一遺跡で数軒が検出されている程度で、やはり大きな集落は発見されていない。

中世に関しては更に資料が乏しく、下大池区中町立道西遺跡で中世の遺構が20数基検出されているのみであり、様子を伺うには程遠い状況である。

これらの状況も含め、山形村には40箇所程の遺跡が知られているが、その9割方は縄文時代中期の遺跡であり、それ以外の時期はとかく不明な点が多い。今後調査の進展が待たれるところである。

第1表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	時代						備考
		先 土 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 良 平 安	中 世	
下原	下竹田区波田町境		○					
三夜塚	下竹田区三夜塚地籍	○	○					昭和55・56年調査
堀ノ内	下竹田区堀ノ内地籍		○	○		○	○	昭和57年調査
北竹原	下竹田区竹原地籍		○					
神明	下竹田区神明地籍		○					昭和56年調査
北唐沢	下竹田区唐沢地籍		○					昭和57年調査
殿村	上竹田区殿村地籍		○	○	○	○		昭和59・60年調査
ヨシバタ	下大池区保育園周辺			○				



第2圖 調査範囲

III 調査の結果

1. 調査の方法

道路工事の対象となる部分にて重機による試掘調査を行い、その結果をもとに調査範囲を決定した。新設村道の西側起点となる県道上竹田波田線側においては、畑の耕作土下まで深く掘削されている状況で、遺構が存在していたとしても破壊されつくしている状況であった。また遺跡東側の県道新田松本線側においては、砂礫層が一面に広がっている状況で遺構の存在は確認できなかった。よって両者に挟まれた部分である520m²が調査地とされた。

調査はまず重機によって全体の表土を地山であるローム層の上面まで剥いだ後、遺構検出および遺構の掘り下げを人力にて行った。今回の調査区においては昭和40年代前半に圃場整備事業が行われていたため、遺構が存在したと考えられる深さまで削平が及んでいる。東へ傾斜した地形であるゆえ、畠地割の西側はかなりの深さまで削平が及び、東側は削平があまり及んでいない状況であったが、調査区全体としては遺構の残存状況が悪い様に思われた。遺構番号は遺構規模・状況により「SK」・「SP」・「SH」等いずれも「01」から順に番号を付けた。但し遺構掘削により、名称の変更を行った方がよいと思われたものもあったが、混乱を避けるため変更は行っていない。測量は作図できるものが調査担当者しかおらず、掘削作業に図化作業が間に合わない状況が予想されたため、平面図に関しては（株）写真測図研究所に作業の一部を委託した。現場にて作図の際、測量するポイントの位置・標高をトータルステーションによって測量し、コンピューター処理がなされた後、ポイントのみを出した遺構図(1/20)をもとに、現場にて遺構図の結線作業を行い、レベル値は後日測量成果簿の数値を図面に記入するという方法をとった。遺構の掘削は半分掘削した後、土層を観察し、分層できるものや特殊なものに関しては土層断面図の作成と土色・土質の観察をし、その他は土色・土質の観察のみを行い完掘した。

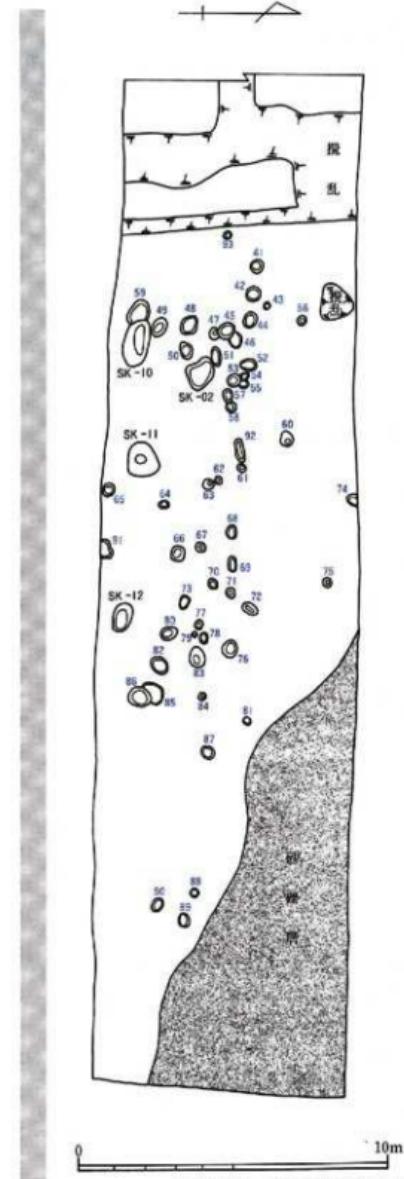
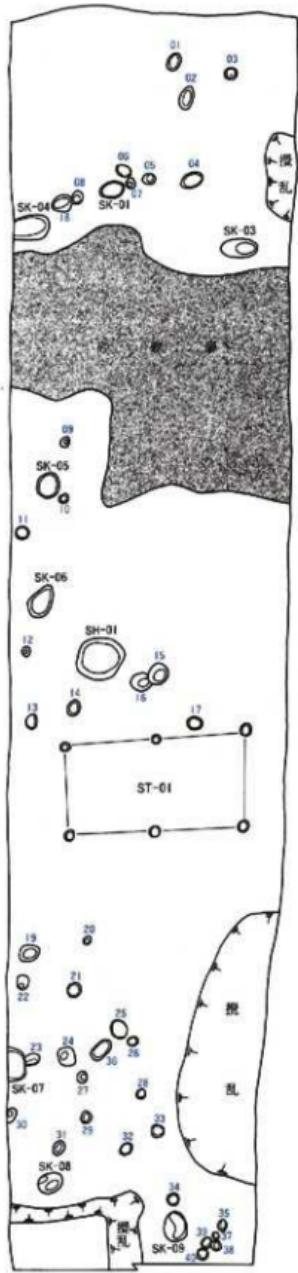
2. 検出遺構

(1) 掘立柱建物址 ST-01 (第4図)

調査区の中央付近にて1棟のみ検出された。遺構検出時において明瞭に1間×2間の柱穴配置が確認できたため掘立柱建物址として遺構番号を付けたが、掘削してみたところいずれも深さが10cm程度と浅く、柱痕も確認することができなかつたため建物として成り立たない可能性もある。建物規模は桁行2間5.7m、梁行1間3.3m、面積は18.8m²で、棟方向はほぼ南北方向をさす。柱穴の掘り方は30cm程度の円形で、柱間の寸法は桁行2.8mである。建物址の時期的な指標となる遺物は、柱穴内からいずれも出土がなく推測する手立てがない。

(2) 土壙 SK-01～12 (第4図・第5図、第2表)

12基が検出され、調査区の全域に分布する。平面形態は楕円形ないし長楕円形のものがほとんどで、



断面形状は桶状、タライ状、皿状等様々であるが、タライ状をなすものがおおい。埋土は概ね黒褐色土であり、埋土中に礫等含まない。出土遺物は極めて少なく、SK-12から土師器の小片が1点えられたのみで、その時期も小片のため時期をつかむ事が困難である。すべての土壌について記述する必要もないと思われるが、第2表にその大きさ・形状等を一覧表にして記載した。

(3) ピット SP-01~93 (第2表)

概ね50cm程度かそれ以下の遺構をピットとした。93基が検出され、全体的に分布が見られるが、調査区東寄りにやや固まって見られる。ピットの深さは概ね20cm前後と浅めのものが大半である。出土遺物はSP-02、SP-45、SP-48から土師器と思われる小片が数点出土したのみでほとんど見られず、その帰属時期は不明である。こちらに関してもすべてについて記載する必要がないと思われるが、第2表にそのデータを記載した。

(4) 集石遺構 SH-01 (第4図)

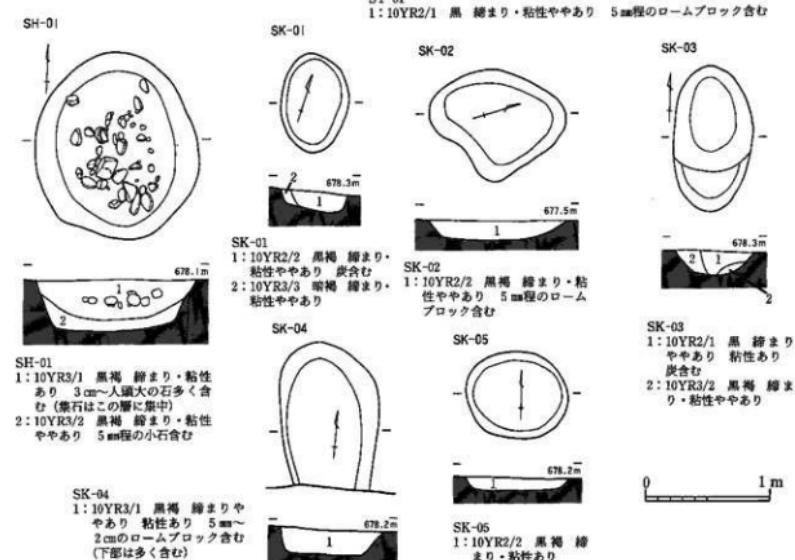
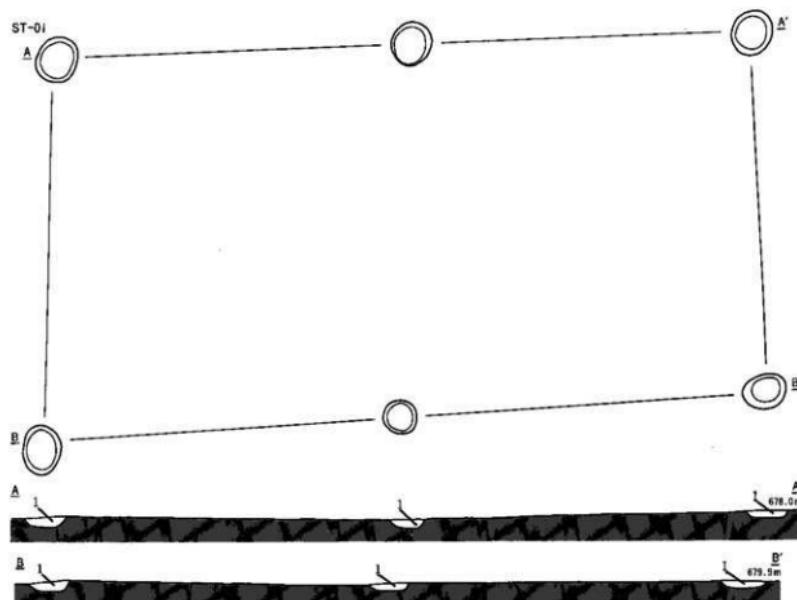
調査区西寄り、ST-01の西隣にて1基のみ検出された。南北154cm、東西122cmをはかる楕円形の平面形状で、深さ36cmをはかるやや深いタライ状の断面形状を呈す。埋土は2層に分割することができたが、その上の層を中心に拳大から幼児の頭大の石がやや隙間があるものの、遺構中央部寄りに固めて詰められた状況で検出され、集石遺構と認定された。出土遺物は土器小片5点と少なく、図示できたのは第6図1のみであるが、縄文中期初頭の深鉢胴部上半の破片と考えられ、遺構の時期もこの期のものと思われる。

3. 出 土 遺 物 (第6図)

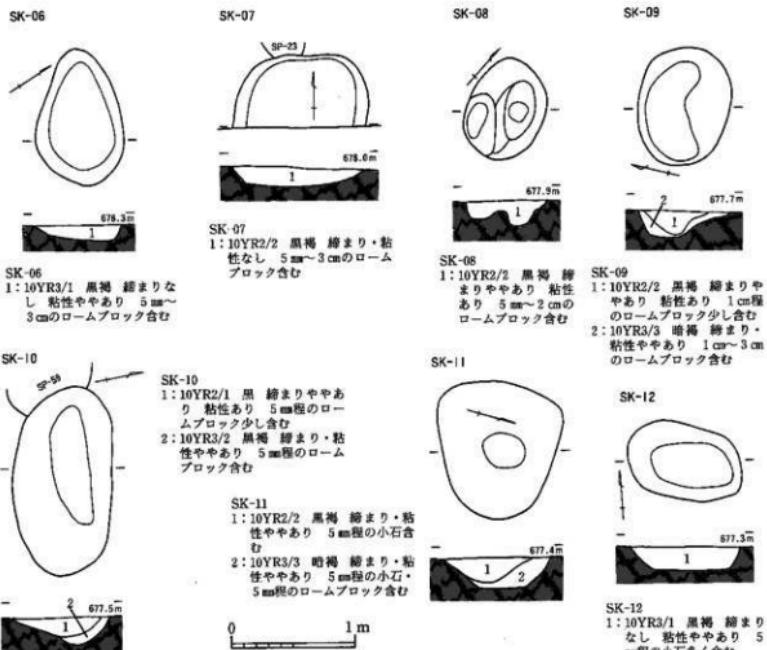
今回の調査で出土した遺物はごく僅かで遺構に伴って出土したものは数点にとどまる。図示できたのは土器拓本8点、石器4点である。

1は集石遺構のSH-01から出土しているが、深鉢の胴部上半破片と思われ、地文に櫛齒状工具による集合沈線を縦位に施した後、半截竹管による矢羽状を呈すると思われる沈線文を施している。2は頸部から口縁部にかけての破片で、屈曲部に半截竹管による半隆起結節状の連続押し引き文、口縁部側に縦位の集合沈線文が見られる。1・2とも縄文中期初頭梨久保式期に帰属すると思われる。3は口縁部に縄文原体を縦に押し付け施文したものと連続して横へ配し、それ以下の部位には単節LR縄文を充填しているが、小片であり時期は特定しがたい。4は半截竹管による深く刻んだ沈線文を矢羽状に配し、その間に三角印刻文を施している。縄文前中期晴ヶ峰式土器に見られる様相である。5は横走隆帯の脇に沈線文が施文され、下の部分のみさらに連続して棒状工具による刺突がなされており、それ以外の部分は無文である。

6~8は須恵器片である。いずれも外面にタタキ目がみられ、6はタタキ目を不完全ながらなで消している。内面にはあて具等の痕跡は見られず丁寧にナデ調整されている。時期は特定しがたい。土器はこの他に50数点出土したが、縄文土器は少なく土師器や須恵器に混じって灰釉陶器も見られた。いずれ



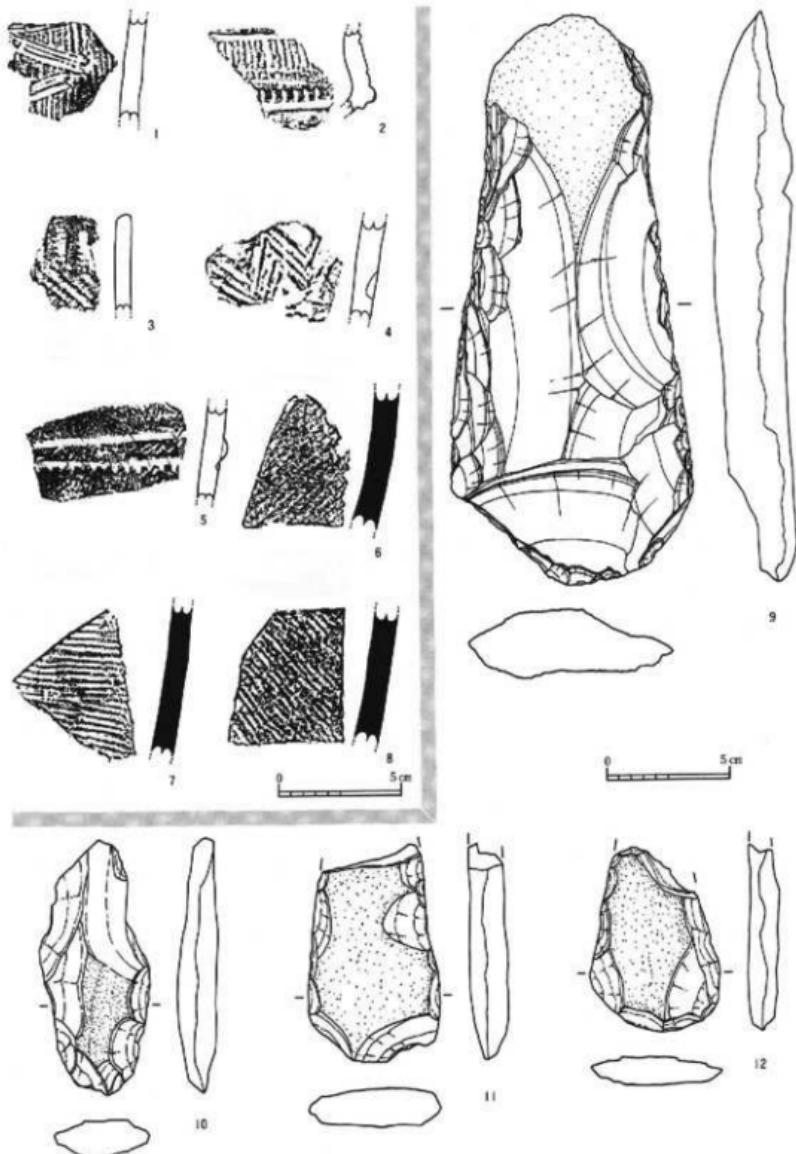
第4図 検出遺構(1)



第5図 検出遺構(2)

も小片であり詳細な時期の特定は難しく図示し得なかった。

石器は黒曜石の剝片が10数点出土したほか、打製石斧が図示した9~12を含め5点出土している。9は表土除去作業時に出土した。長さ23.4cmをはかる巨大な石斧で、重さも770gとかなり重い。10は遺構検出作業時に出土した。75gをはかるが剝離があらく形態的にも雑である。11・12は表土除去作業時に出土したが、ともに上部を欠損している。また図示していないが、下部の大半を欠損した打製石斧が遺構検出作業時に1点出土している。



第6図 出土遺物

第2表 土壌・ピット 一覧表

遺構名	長径	短径	深さ	平面形状	断面形状	切り合い関係	備考
SK-01	82	55	18	橢円形	タライ状		
SK-02	111	93	18	不整円形	皿状		
SK-03	120	65	27	長楕円形	逆台形状		
SK-04	-	80	31	長楕円形	タライ状		南端調査区域外
SK-05	83	72	12	円形	皿状		
SK-06	114	73	15	橢円形	皿状		
SK-07	110	-	17	楕丸方形	皿状	<SP-23	南半調査区域外
SK-08	83	70	20	橢円形	不整形状		
SK-09	98	76	23	橢円形	逆台形状		
SK-10	156	68	27	長楕円形	逆台形状	<SP-59	
SK-11	115	104	27	橢円形	タライ状		
SK-12	97	63	19	橢円形	タライ状		

遺構名	長径	短径	深さ	切り合い関係・備考	遺構名	長径	短径	深さ	切り合い関係・備考
SP-01	59	41	9		SP-20	29	28	11	
SP-02	74	47	16	土師器片出土	SP-21	48	45	8	
SP-03	40	38	6		SP-22	48	38	15	
SP-04	72	48	16		SP-23	-	38	14	>SK-07
SP-05	44	38	20		SP-24	69	54	12	
SP-06	54	39	7		SP-25	68	56	8	
SP-07	37	29	22		SP-26	33	32	6	
SP-08	47	37	14	>SP-18	SP-27	35	33	10	
SP-09	35	27	11		SP-28	34	27	7	
SP-10	31	31	18		SP-29	39	36	14	
SP-11	45	41	8		SP-30	-	36	32	南側調査区域外
SP-12	32	28	20		SP-31	48	36	10	
SP-13	49	40	8		SP-32	47	36	8	
SP-14	53	41	5		SP-33	42	42	13	
SP-15	70	61	12	<SP-16	SP-34	41	39	12	
SP-16	-	58	18	>SP-15	SP-35	35	29	14	
SP-17	47	44	8		SP-36	77	46	18	
SP-18	67	57	24	<SP-08	SP-37	29	23	11	
SP-19	69	55	10		SP-38	36	31	9	

遺構名	長径	短径	深さ	切り合い関係・備考	遺構名	長径	短径	深さ	切り合い関係・備考
SP-39	42	33	15		SP-66	48	44	13	
SP-40	38	36	8		SP-67	32	30	9	
SP-41	45	45	11		SP-68	45	36	7	
SP-42	49	47	7		SP-69	52	29	6	
SP-43	24	23	6		SP-70	31	31	8	
SP-44	48	43	16		SP-71	31	30	9	
SP-45	61	50	21	<SP-46・47 土師器片出土	SP-72	58	34	11	
SP-46	-	44	15	>SP-45	SP-73	46	33	5	
SP-47	38	-	23	>SP-45	SP-74	-	38	7	北半調査区域外
SP-48	59	53	14	土師器片出土	SP-75	25	23	7	
SP-49	63	49	13		SP-76	57	50	19	
SP-50	57	40	38		SP-77	32	28	5	
SP-51	66	33	11		SP-78	36	28	5	
SP-52	57	39	14		SP-79	16	15	5	
SP-53	43	40	17	<SP-54・55	SP-80	57	42	14	
SP-54	-	25	15	>SP-53 <SP-55	SP-81	27	22	7	
SP-55	-	32	5	>SP-53・54	SP-82	65	48	9	
SP-56	30	30	9		SP-83	67	53	19	
SP-57	46	32	15	<SP-58	SP-84	24	24	19	
SP-58	-	34	11	>SP-57	SP-85	81	-	10	>SP-86
SP-59	-	66	9	>SK-10	SP-86	75	64	14	<SP-85
SP-60	46	41	13		SP-87	42	42	14	
SP-61	26	24	7		SP-88	30	27	60	
SP-62	25	25	8		SP-89	45	35	70	
SP-63	35	31	15		SP-90	47	36	37	
SP-64	34	23	14		SP-91	-	62	19	南半調査区域外
SP-65	42	40	17		SP-92	75	27	11	
					SP-93	28	26	8	

・ 切り合い関係の負号が示す意味は、「<」：切る、「>」：切られる、である。

・ 数値欄に「-」が記入してあるものは、切り合い状況や調査区域外に及ぶため、測量不可能を意味する。

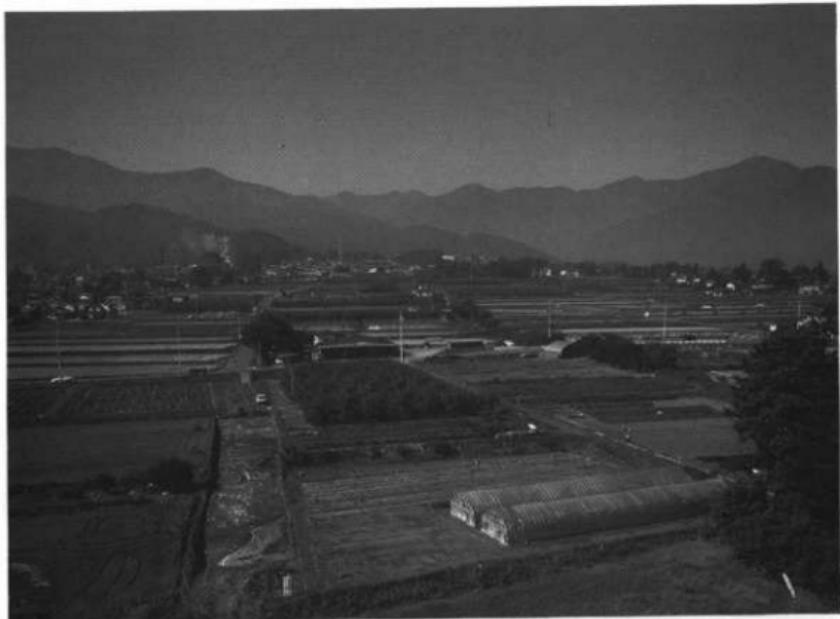
IV　まとめ

今回の発掘調査は調査面積520m²と狭く、遺物の出土量も僅かであったため、本郷遺跡の時期・性格等詳細にまで十分迫ることはできなかった様に思われる。しかしながら本郷遺跡における初めての発掘調査となり、遺跡北端側の範囲をほぼ確定できた。それに加え、今まで土師器や須恵器の出土が知られていたことから奈良・平安時代の遺跡と考えられていたが、縄文時代の遺構・遺物を得ることができたのは新たな発見であり成果である。

まず遺跡の範囲から考えてみたい。北へ100m程いった場所には唐沢川が東流していることから、調査地の所々に砂礫層の広がりが確認され、調査区をはずれた東側にも全域に砂礫層が広がっていることが試掘調査にて確認されている。また調査地における遺構の存在状況が疎であったのに加え、遺物の出土も少なかったことから、この場所が遺跡の北端及び東端でこれより北及び東に遺跡は展開しないと考えられる。なお発掘現場に訪ねてこられた地元の方の話では、現在遺跡の南端と考えられている場所より南の畑内にて、灰胎陶器や黒色土器と推察される土器が出てきたということを数人の方から伺うことができた。またナガイモを掘っている際、畑の地面から3尺位の深さに扁平な石を何枚も敷き詰めてある箇所が出てきて、何だろうかと不思議に思ったという話を伺うことができ、敷石住居址ではないかと推察された。以上のことからすれば、本郷遺跡の範囲は南側にかなり広がると推測される。この周辺地でも宅地開発が数年来盛んであるゆえ今後注意をはらうとともに、試掘確認調査等で遺跡の正確な範囲を調べていく必要性を感じた。

山形村誌の記述によると、本遺跡では土師器片や須恵器片が出土したとのことで、上竹田区四ツ谷地籍に存在する穴観音古墳をはじめとした大久保古墳群まで距離的に近いことから、関連を考える上で注目される遺跡とある。しかしながらこれを追及することは今回の成果ではできない状況である。今後その実像に迫るべく調査をしていかねばならないだろう。また、たった1基ではあるが縄文中期初頭の集石遺構を確認することができたのに加え、遺構に伴って出土したわけではないが打製石斧が5点発見され、縄文時代の遺跡としても視野に入れる必要が生じた。

最後となりましたが、調査地周辺にて耕作されている方々には試掘調査も含め色々御迷惑をおかけし、御配意いただいたことも多かった。また発掘作業や整理作業に参加いただいた作業員さん方をはじめ、各方面関係者の方々にもいろいろお世話になり、本書発行まで終了することができた。あらためて御理解・御協力いただいたことに感謝申し上げ、本書のしめくくりとしたい。



調査地より西方向 唐沢川扇状地を望む



調査地より東方向 松本平南部を望む

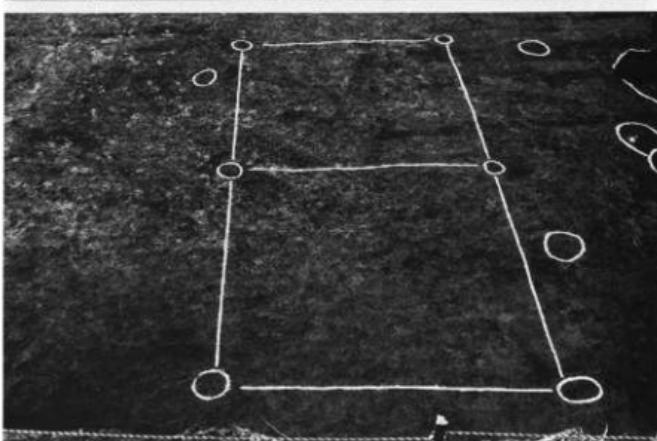
図版 2



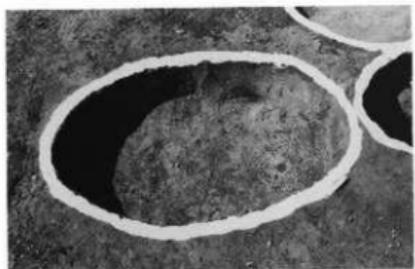
調査前全景
(西から)



SH-01
集石遺構
出土状況
(北から)



ST-01 検出状況
(北から)



SK-01 (東から)



SK-08 (西から)



SK-09 (西から)



SK-10 (東から)



SK-11 (東から)



SH-01 (南から)

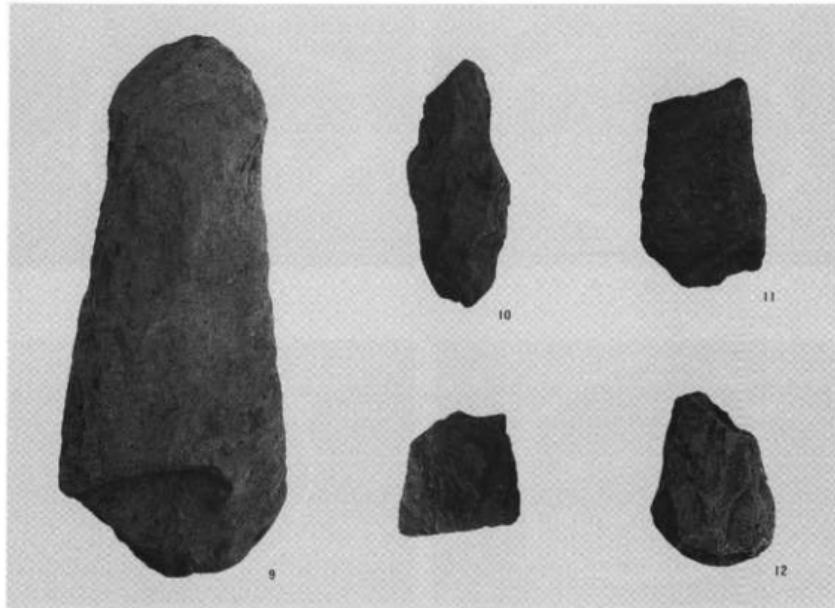


作業風景

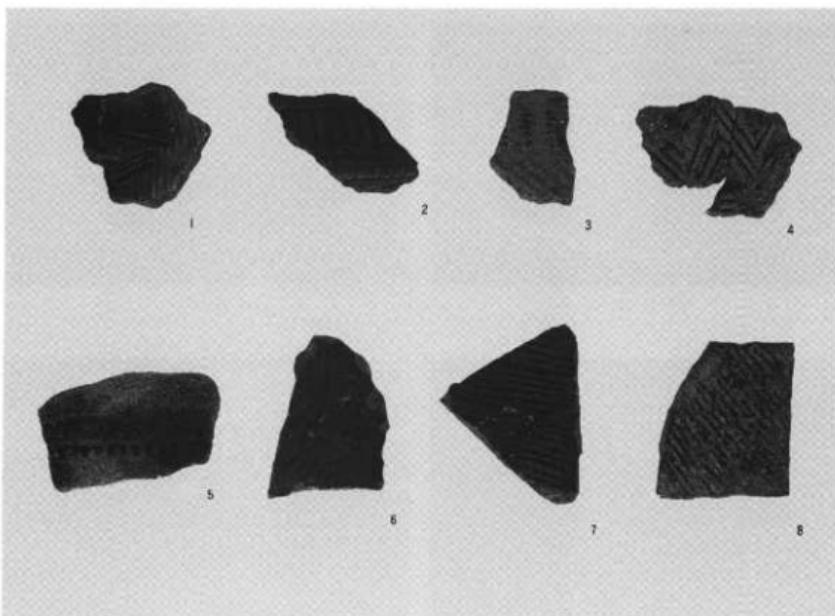


鉢盛中生徒職場体験作業風景

圖 版 4



出土打製石斧



出 土 土 器

報告書抄録

ふりがな	ほんごういせき							
書名	本郷遺跡							
副書名	地方特定道路整備工事に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	山形村遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	和田 和哉							
編集機関	山形村教育委員会							
所在地	〒390-1301 長野県東筑摩郡山形村2040-1 TEL 0263-98-3155							
発行年月日	平成12(2000)年3月31日(平成11年度)							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本郷	長野県東筑摩郡山形村	204501	21	36度10分29秒	137度53分05秒	19991007～19991029	520m ²	地方特定道路整備事業(村道北38号線)に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
本郷	集落址	縦平	文安	集石遺構1 掘立柱建物址1 土壤12 ピット93	土器片(绳文土器・ 土器・須恵器・灰 釉陶器) 黒曜石剣片 打製石斧			

山形村遺跡発掘調査報告書 第9集

本郷遺跡

地方特定道路整備工事に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成12年3月31日

編集発行 山形村教育委員会

印刷刷本 もえぎ企画書籍